

第54回日本臨床腎移植学会

松 浦 秀 哲*

2021年2月17～19日に第54回日本臨床腎移植学会が開催された。当初学会は福島県いわき市のホテルハワイアンズで開催される予定であったが、COVID-19感染拡大の影響を受けて完全web開催となった(図1)。

大会長は国立病院機構水戸医療センターの湯沢賢治先生で、学会のテーマは「継往開来(けいおうかいらい)」とされた。これは中国の遺産に刻まれた

文言で「先人の事業を受け継ぎ、未来を切り開く」という意味である。先人が築き上げた腎移植医療が、現在の若手腎移植医や医療者に受け継がれているだろうかという思いから設定された。

末期腎臓病の治療法として腎移植は日常診療になっている。腎移植の成功には、免疫学的拒絶を回避する必要がある。1901年にKarl Landsteinerがヒトに血液型を発見して以来、不適合腎移植を実施すると直ちに超急性拒絶反応が発生して移植腎機能が廃絶といわれ禁忌とされてきた。先人たちの工夫と努力により、免疫学的手法を駆使することで拒絶を回避する術が開発され、移植の成績は向上した。腎移植は、移植前後からドナーとレシピエントに医療チームが関わる。そのため多職種連携は必要不可欠であり、本学会も腎移植に関わる多職種が参加している。

ここで我が国の移植の状況について触れておく。2021年1月現在、腎臓移植を希望する登録者数は13,198名である。1997年に臓器移植法が制定され、脳死後の臓器提供が可能になったが、1995年から2019年までに腎臓の提供数は2,312、移植数は4,327であった。法制定の前から比べれば、移植数は増えている。しかし、世界の臓器提供数と比較すると100万人あたりのドナー数は日本0.77に対し、アメリカは33.32、スペインは48.0であり、まさに桁違いである。このような背景の中、日本では血縁者や配偶者からの腎移植の機会が多くなった。



図1 学会ポスター

* 藤田医科大学 医療科学部 医療検査学科 mhide@fujita-hu.ac.jp

必然的に ABO 不適合腎移植を行わざるを得ず、多くの症例を経験した日本から多くの論文が報告され、ABO 不適合腎移植において世界をリードするまでになった。

本学会では、移植腎の生着に関連して免疫学的ハイリスク患者に対する腎移植の現状や課題、免疫抑制療法の実践等について議論されていた。免疫抑制剤も様々なものが開発され臨床使用されている状況がよくわかった。さらに免疫関連拒絶反応を抑えるための減感作療法は免疫抑制剤の使用に留まらず、免疫グロブリン大量療法等新しい治療法が取り入れられており移植医療の進歩を感じることができた。

近年、増加している先行的腎移植についてもシンポジウムが組まれていた。先行的腎移植は慢性腎臓病による合併症の発症、尿毒素症状、透析生活における様々な制限等のネガティブな経験をしなくて済むという大きなメリットがある。また先行的腎移植は移植腎生着率や患者生存率に優れているということも報告されている。一方で長期入院の苦痛や育児・家事ができない罪悪感等入院中の苦悩の訴えは先行的腎移植患者の方が強いとされている。術後経過については運動を継続することで先行的腎移植群と維持透析群の差が小さくなること、定期腎生検では透析期間が短い場合には拒絶反応の傾向に先行的腎移植群と維持透析群に有意差を認めないことも報告され、改めて先行的腎移植のあり方を熟考する機会となった。

腎移植の学会であり、献腎移植数を増やすためにはどうすれば良いのかという議論がシンポジウムでも行われていた。著者自身、献腎移植数を増やすことに何の疑問も感じることはなく、増加することが望ましいという感覚でシンポジウムを拝聴していた。そのような中、移植コーディネータの講演は著者の価値観を改めさせるインパクトがあった。彼女は、はっきりと「私は腎移植を増やすことを目的とは考えていません。」と述べた。続いて「私の役割は腎臓提供をする権利としない権利を守るために情報提供と身体的、精神的なフォローアップを実施することです。」と自身の役割と目的を明確に語った。日常的に移植医療に関わり、「移植」

に慣れてしまった自分の感覚のずれを突かれたようだった。意思決定の支援により患者や家族の権利が守られる。移植数の増加はその後の話である。コーディネータの存在の大きさを痛感した瞬間であった。

医療職種以外の講演で興味深かったものは、「HondaJet による臓器搬送や患者搬送の可能性について」であった。本学会のポスターにも HondaJet が描かれている。最大 8 人乗りの小型ビジネスジェット機である HondaJet はエンジンを主翼の上面に配置した常識を覆す発想のデザインで、2019 年には緊急医療搬送型が発表された。ストレッチャーはもちろん、医療機器対応型の電源を 5 つ設置し、酸素供給装置やポンプ式吸引装置等の各種医療機器の搭載も可能になっている。優れた飛行性能、機内の静粛性、高効率な運行が可能な HondaJet は離島間、アクセスが不便な場所から医療施設等の搬送に大きなメリットがあることが示された。

我々も一般演題で「抗体価自動分析法の有効性の検討～愛知県多施設共同研究～」という研究成果を発表した。これまで移植前の抗 A/抗 B の抗体価測定には試験管法を用いた用手検査であった。近年、客観性と再現性に優れるカラム凝集法によって抗体価を測定する技術が開発された。我々は単施設で健常人を対象に試験管法とカラム凝集法の抗体価測定の差異を検討し報告した (Vox Sang, 2018)。今回は対象を ABO 不適合腎移植症例とし、愛知県下の多施設で共同研究を計画した。その結果、カラム凝集法を用いることで再現性よく抗体価測定ができることを示した。移植外科医は、臨床検査技師により計画された多施設共同臨床研究に興味を持ったようであった。また、移植外科の視点で本研究を評価してもらうことで一層の広がりにつながっていく確信を得た。

前述のように臨床腎移植には、移植外科医、臨床検査技師、臨床工学士、看護師、移植コーディネータ等様々な職種が関わっている。普段は、自身の職種から移植医療をみているが、このような学会は職種横断的に移植医療をみるきっかけになり、移植に対する理解を深める上で大変有用であると感じた。